

猿渡さんの

ハNST日記

○患者家族の会の猿渡ハギエさん(54才、荒尾市若葉町。夫の吉也さんは九・二八CO患者で、いまお白鳩病院に入院中)は、こんどの三川鉦正門前で行なわれた大勢五十人によるハNSTに参加されました。このほど、本紙にそのときの貴重な手記をいただきました。猿渡さんはその中で「自分の息の続く限り、夫にかわって三井の責任を追及し続ける」と書いておられますが、せめて猿渡さんの怒りと闘志をみんなのものにするために、その全文を紹介致します。

編集部

第一日目……

ハNSTへ突入

七月二日 (金曜、晴)

五月二十日以来遺族(昭和三十八年の三川鉦炭じん大爆発犠牲者の遺族のこと。以下同じ)・CO患者の諸要求貫徹のため、三川鉦正門に座り込んで闘い続けてきたが、のりくくりと会社の態度はいつごろにちがいがあらず、今日からハNSTに突入。

私は九・二八の一家族であるが、被災した主人は半年も私傷取扱いにされ、見舞金さえ出さない三井に対して、夫にかわり抗議のハNSTに参加する。

私は参加するに当り、まず娘と話し合った。家の留守番と、老母の世話一切をたのまなくてはならないから。

「お母さんのような年寄りがハNSTしなくても、だれがおちね。おばあちゃんもいるのに、どうするね」と娘。

「お父さんが被災したのに、会社は何もしてくれない。入院して収入が減っても、見舞金すら出さない。ほんとうなら、加害者たる会社は相応のことをしなくてはならないのに、私たちがひとつひとついなくては何もしてくれない。訓練も、ソフトボールを、それもこっちが自主的にやるだけで、設備一つしてくれない。仕方がない、補償をせよ、見舞金を出せ、責任をとれ、といわざるを得んではないか。私がハNSTにはいると、あんなは朝から飯たいて仕事にいかんなん。大変なことだぜ、それをしてくれることが、お父さんを守り、会社に対する抗議であり、闘いだよ」

話したら、「では家のことはひき受けた、心配しないでいいからハNSTに参加していいよ」といつてくれた。

娘よ、いっしょに歩こう

苦しくとも息のある限り

夫にかわって三井と闘う

第二日目……

ひもじさを実感

七月三日 (土曜、晴)

からりとした日だ。朝十時四十分ごろ、ハNSTに入った実感あり。気取って見ても、ひもじいという事だ。

三井の奴、無責任な政府許可さんぞ。

家では亡弟の十七歳の供養をしているか。私にかわって娘が夫をたて、娘が父のためがんばれよ。私と共に歩こう。

第三日目……

昔の夫思い出す

七月四日 (日曜、曇り晴)

ハNST第三日目。暑さとひもじさの闘いと、プラス三井との闘いだ。気力を出そう。

仕事ができないから、寝ながら上を向いて雑誌を見ていたら、五分もたたないのに手がだるくなってきた。胃の上ののせてきえ重

第五日目……

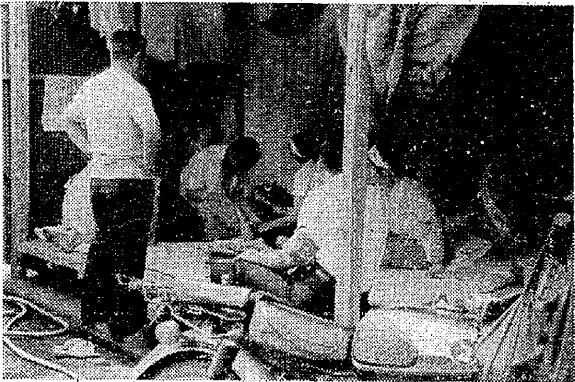
ハNST閉じる

七月六日 (火曜、晴)

昨夜はどうも眠れなかった。朝、突然漢方薬がセロリーの臭いがして、むかついた。そしてむかむかが続くので、道の側に顔を出した。たしか、井手執行委員と家族の会の村上さんが話しておられた。

急に、目先が真暗になった。そのまま横になっ

たが、あのこととはよくわからない。静脈注射をされて、指導部の中へ移動させられて、涼風に当たったら少し落ちついた。ドクターストップという



医師の暖い介抱を受ける猿渡さん

労災補償を打ち切られたCO患者の人たちに対する被害認定が、労働省から発表されたと新聞に出ていた。それによるといっただけは被害認定をうけたはずの新労組の患者の中には、二階級特進の者さえいた。異議申請していた新労組患者は、わずか五十名だったとおぼえているのに。

この事実、前に「症状が固定した」という事で、労災補償が打ち切られたのは間違っていたのだ。労働省自から、その事をさらけ出した。十四時三十分、昭陽院より、医師・看護婦来訪。体温・血圧・脈はくの測定あり。私は極めて順調。

十八時四十分ごろ、青年部十人の激励第一陣。感謝、感謝。

夜娘が訪ねて来た。私の事を思っ、今日昼食はハNSTだった。三井の子だ。

今日あたり、元気なようでも、それは気力。実際は健康なんだから三度三度、普通食を美味しく

くなった。

スラックスのゴムが、こんなにも私の腰のまわりをしめつけようとは思わなかった。それどころか、道を通る娘さんのハイヒールの足音さえ腹にこたえてきた。「とめてエ」といいたいくらい。

何かといえば、小屋備えつけのベルを押す。組合役員・主婦会幹部・政治局長の肩書のあるおれきれが、「ハイ、何でもしよう」といつてきてくださる。有難い。感謝申し上げます。

夕方、原万田地域・主婦会分会の激励。同志愛に感謝。さらに頑張ろう。

中央団交に、今夜交渉団上京の由。その一人として出発準備中の谷端三川指導部組織部長を呼びとめた。

「組織部長、いっかげんな事で要結してくるなら、承知せんすよ。かみつくけんすね。よかです。命はかけて頑張るとるけん、あまたたち

とは思いつつも、気力だけではどうしてどうし

昨日から余り話さない事に決心して、なるべく静かにしているのに朝洗面の時、膝を流し台の下にくっつけておかないと、一人では立てて洗うことができなかった。

今日、守衛の奴が挑発をかけてきやがった。すったもんだの末、やってきた守衛長がその守衛に「お前が悪か。お前がやまれ」といった。そこでその守衛が合志三川指導部長にともなわれ、頭をさげにきた。門内に飛びこまれてもしては困るので、あやまりにきたのだらう。それで一応チョン。

私たちのハNSTは、ダテにやっているんじゃないんだ。

夜、合志三川指導部長の「キンチョールおどりの披露があったが、これもハNSTに参加したおかげで思いがけない見ものだった。

のだな。私の体で、よくこれまでもちたえたものだと思う。

私たち夫婦が結婚して以来、二十九年になる。私は直接戦争を経験した者の一人であるが、戦場に夫を残して私一人ひと足先に帰ってきて待つ事四年余り。

うら若き青春時代をよき見も許されず、口わがつまさきに想いを走らせ、銃後の守りとかでひたすら夫の無事帰還を祈りつづ、その帰りを待ち暮らした。鹿兒島生れの一男性と、熊本生れの二女性が将来を固く誓い合い、暗い戦争のさなかに仮の祝言をしたまま別れて帰るなら。

「応召兵だから、軍隊にとられても一年すれば帰ってくるよ」との語に、うっかり乗った私もわかった。夫は、待てど暮せどこぬ人を……になつてしまったのだ。

やっと復員して帰った夫。米のマル炭配給と住宅につられて取りあえず三川鉦に就職したが、もともと神戸の造船会社の技手さん。後では転職したいと思ったが、それには早や夫の年令が制限となった。

やむを得ず働いているうち、停年を目前にして坑内火災(四十二年九月二十八日)にあい、今なお入院生活をおくっている私の彼である。

おかげで、銀婚記念旅行もパーになった。それどころか強いられた別居生活。全快はおぼつかないといわれるCO患者の夫と、この息のある限りは生活を共にしなくてはならず、もう心底から笑える日もないだらう。

苦しい事のみ多い日々ではあるが、三井独自資本が災害責任を完全にとるまではやったで、今三井の主婦の九割が、ちゃんとした外の職についている。小さい企業のこと、なかなか「休ませてください」とはいにくいと思う。しかし、自分の彼の事が大事なのか、自分の今の仕事か大事なのか、考え直してほしいものだ。「バカらしい」といつて闘いを放棄しては、権利の放棄ではない。

今日、ハNST解散に当り、分会の人たち、組合の人たち、政治局長の人たちに深く感謝申し上げる。CO患者・遺族が生きている限り、自分の息のある限り、苦しくとも闘い続けよう。闘いは、労働者の宿命なのだ。

まして三井はかの資本家どもに對して、災害が起きないための保安を確保させなければ、労働者の命はいくらあっても足りない。

今日まで頑張つて守り続けて来た三井魂を、明日からの闘いにさらに強く、高く燃やし続けることを誓って、ハNST日記を閉じる事とする。